

第5章

CHAPTER 5

子どもの病気と保育

1 子どもの健康状態の把握

1 子どもの健康状態をみるポイント

保育者にとって、普段の子どもの健康状態を把握しておくことは、大変重要な意味があります。「いつもと様子がちょっと違う」と感じることで、子どもの病気を見つける手がかりになり、集団感染を防ぐことにもつながります。子どもの元気な時の平熱を知っておくと、体調の変化に気づきやすくなります。また乳幼児は言葉がまだ話せなかったり、正しく痛みや不快感を伝えることができなかったりするので、保育者が丁寧に観察を行うことが大切になります。特に乳児の場合は、泣き方がいつもと違うかどうか、体調を把握するうえでの手がかりになります。

以下のような子どもからのサインを見逃さないようにしましょう。

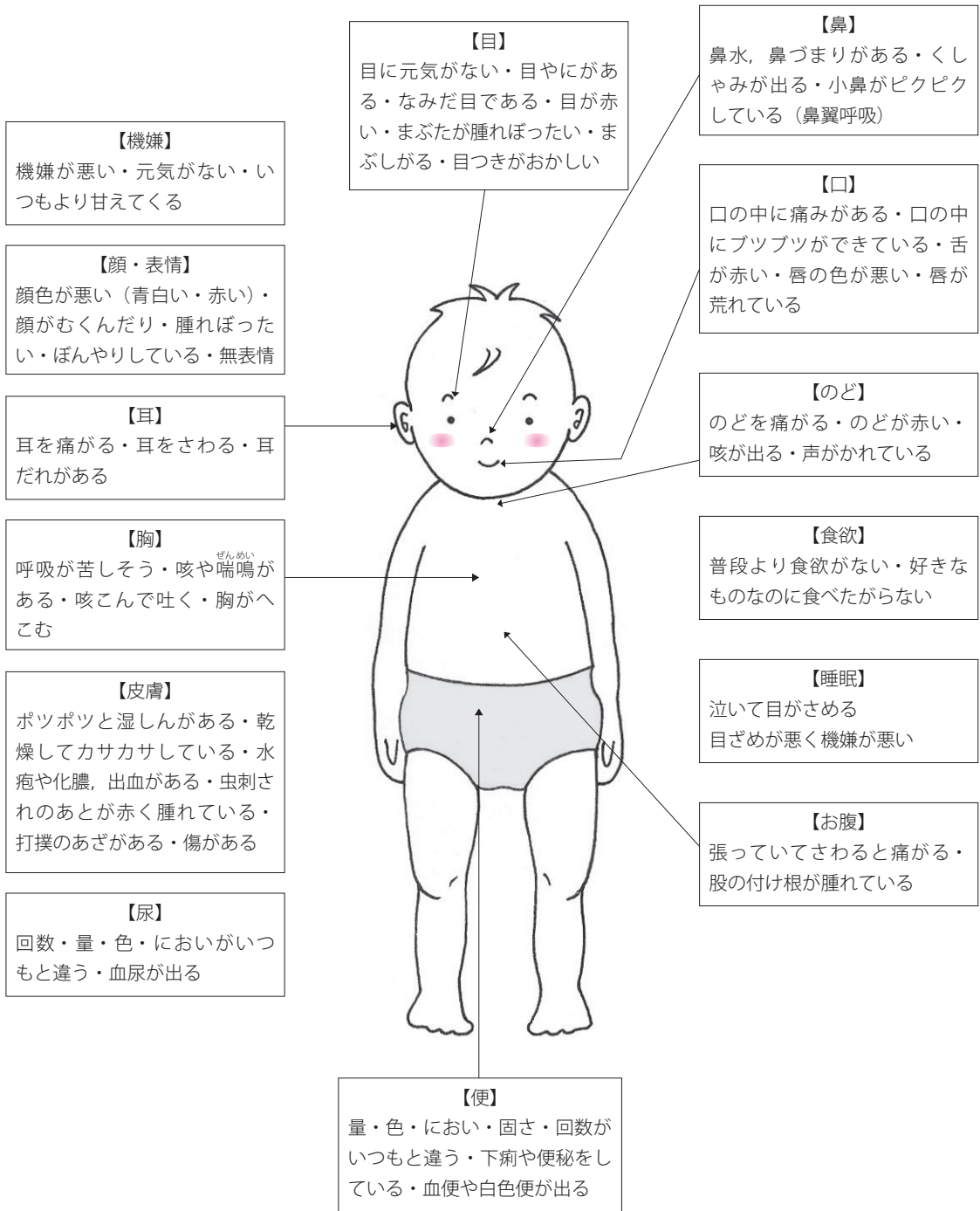
- 親からなかなか離れられず、機嫌が悪い。ぐずる。
- 睡眠中に泣いて目が覚める。
- 元気がなく顔色が悪い。
- きっかけがないのに吐く。
- 便がゆるい。
- いつもより食欲がない。
- 目やにがある。目が赤い。

また、今までにない発しんに気がつくこともあります。その時は、

- 発しん以外に何か症状はないか？
- 時間とともに発しんが増えていないか？

を観察します。クラスや兄弟、一緒に遊んだ友だちの中に、疑われる感染症が出ていないか確認してみましょう。

図5-1 子どもの健康状態を把握するポイント



出所：厚生労働省『保育所における感染症対策ガイドライン（2018年改訂版）』『子どもの症状をみるポイント』より改変。

2 子どもの健康状態の確認

(1) 体温

発熱の有無を調べるために、園ではしばしば体温測定（**検温**）を行います。月齢が低い乳児は、登園時だけでなく**午睡**（お昼寝）の後や、その他、様子がいつもと違うときにも、その都度体温を測定します。特に乳児は体温が高めであるため、37度台が平熱の場合も少なくありません。一般的には37.5度を超えると発熱と考えますが、もともと平熱が高い子どもや、厚着している子ども、激しく泣いている子どもなどは、測定値が高めに出る場合があります。逆に、低体温の子どもの場合は、37.5度まで上がると、何らかの病気による発熱の可能性を考えなくてはならない場合もあります。保育者は、元気で健康な状態の子ども一人一人の**平熱**を把握しておく必要があります。

知っておこう！

体温測定（検温）のしかた

乳幼児の場合は基本的には腋窩（わきの下のくぼんだところ）で測定します。わきの下に汗をかいている場合は汗をぬぐい、体温計は先端が腋窩にあたるように、衣服の下から体温計を入れ、およそななめ45°の角度ではさみこみます。乳幼児はじっとしているのが苦手なので、保育者の膝の上にのせて測り、上から腕を押さえます。乳幼児が動かない工夫として、絵本などを読みながら行くと比較のおとなしく測定することができます。その他の測定部位としては、耳・口・直腸などがありますが、園では腋窩で測定するのが一般的です。

検温をした後は、体温計を消毒します。



年齢別正常体温

	体温（℃）
乳 児	36.0～37.4
幼 児	36.0～37.4
成 人	35.5～36.9

(2) 脈 拍

脈拍は、年齢が低いほど数が多くなります。それは、乳幼児の場合 1 回の拍動で心臓から押し出される血液の量が少ないため、回数を増やす必要があるからです。また発熱や運動、泣いた後などでも脈拍数は増加します。

知っておこう！

脈拍数の測り方

一般的には、手首の、親指側の下の方にある^{とうこつ}橈骨動脈で測定します。人さし指、中指、薬指の 3 本の指を橈骨動脈にあてて、脈の触れるのを確認します。1 分間測定することが望ましいですが、30 秒間測定した測定値を 2 倍したり、15 秒間測定した測定値を 4 倍したりする方法を用いる

こともあります。

年齢別安静時脈拍数

	脈拍数 (毎分)
乳 児	120 ~ 140
幼 児	80 ~ 120
成 人	60 ~ 80



3本の指で測定します。

(3) 呼 吸

呼吸は、年齢が低いほど回数は多くなります。発熱や運動でも呼吸数は増加します。また息苦しい状態のときは、呼吸が乱れていないのかも観察する必要があります。

知っておこう！

呼吸数の測り方

安静にしている乳幼児の胸やお腹の動きや、口や鼻から吐き出される息の様子を観察したりしながら測定します。呼吸数は意識すると変化しやすいので、測定することを気づかれないようにします。

年齢別安静時呼吸数

	呼吸数 (毎分)
乳 児	30 ~ 40
幼 児	20 ~ 30
成 人	15 ~ 20

